

Title	マーカス・ガーヴィーとパン・アフリカニズム： ガーヴィー主義の一考察
Sub Title	Marcus Garvey and Pan-Africanism : reflections on Garveyism
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1969
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.42, No.6 (1969. 6) ,p.21- 57
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690615-0021">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19690615-0021</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# マーカス・ガーヴェーとパン・アフリカニズム

——ガーヴェー主義の一考察——

小 田 英 郎

- 一、問題の提起
- 二、ガーヴェーの人種観とアフリカ観
  - I ガーヴェーの人種観
  - II ガーヴェーのアフリカ観
- 三、ガーヴェー主義運動の展開
  - I 万国黒人向上協会の創設と発展
  - II 黒人企業の経営——経済的自立の試み
  - III アフリカへの帰還運動とその挫折
- 四、結語——ガーヴェーとパン・アフリカニズム

## 一、問題の提起

本稿は、マーカス・ガーヴェーの思想と行動をパン・アフリカニズムの視点から検討し、評価しようとする一試論であ

る。

マーカス・ガーヴィーは、一八八七年八月西インド諸島のジャマイカに生れた生粋の黒人で、一九一四年に万国黒人向上協会 (Universal Negro Improvement Association and African Communities' League) を組織し、一九一六年には合衆国に渡り、ニュー・ヨークのハーレムを根拠地として大規模な黒人大衆運動を展開した。ガーヴィーの影響圏は広範囲に広がり、一九二〇年以後数次にわたつて開催された万国黒人向上協会国際大会には、アメリカ大陸・西欧世界の黒人代表のみならず、アフリカからの代表すら参加したほどであつた。ガーヴィーの掲げたスローガンは「アフリカ内外のアフリカ人のためのアフリカ」であり、その運動の具体的帰結は「アフリカへの帰還」(Back to Africa)であつた。そのゆえにガーヴィーの運動は「ブラック・シオニズム」と呼ばれ、ガーヴィー自身は「黒いモーゼ」にたとえられた。しかしながら、かれの運動は、ライベリアへの植民計画が潰えた一九二四年なかばを境に下向線をえがきはじめ、一九二五年二月、郵便詐欺事件にかかわる有罪確定判決でガーヴィー自身がアトランタ刑務所に収容されたため、事実上崩壊したに等しい結果にたちいたつた。ガーヴィーは一九二七年末、クーリッジ大統領から特赦をえたものの、出獄と同時にジャマイカへ強制送還され、その後はジャマイカ、英国、カナダ等で活動を続けたが、当時一、五〇〇万の黒人を擁するといわれた活動の基盤に合衆国からきりはなされたこともあつて、運動は昔日の勢力を回復することができず、失意のうちに一九四〇年六月、ロンドンで客死するのである。

さて、以上のごときガーヴィーの活動に対して、世人があたえた評価はさまざまである。その活動が「太く短かつた」ためでもあろうが、ガーヴィーほど毀誉褒貶のはげしい運動家は、黒人運動史上稀であろう。しかしながら、これを概括すれば、多くの場合称讃より批判が先行し、マイナスの評価がプラスの評価を上回つているのであり、しかも(欧米とくに合衆国の) 同時代人およびそれに近い人びとほどそうした評価をする傾向が強いといえよう。すなわち、「愚かな夢想家」、「大

衆煽動家」、「狂信的な人種的ショーヴィニスト」というのがこれら批判者の画きだしたガーヴィー像であり、そのゆえにガーヴィーの果したプラスの機能あるいはかれのもつていたプラスの側面——たとえば「無気力であつた一九二〇年代の欧米世界黒人大衆を覚醒させ、かれらに人種的誇りと向上への希望を植えつけた」という側面——は、無視されないまでも、その影を薄くしていたのである。

しかしながら、こうした評価の姿勢は、いささか合衆国黒人運動史の観点に偏しているように思われてならない。そういう観点に偏しているからこそ、後述のように、「白人社会への同化」を拒否したガーヴィーの思想と行動が「危険な人種的ショーヴィニズム」として映るのであり、「アフリカへの帰還運動」が突飛で愚かな「分離主義」として否定されてしまうのではなからうか。たしかに黒人の分離主義は現在の合衆国においてすら異端とされているのであり、したがつてそうした分離主義を、それも「アフリカへの帰還」というかたちの分離主義を、一九二〇年代前半の時期に唱えたとあれば、ガーヴィーが夢想家、人種的ショーヴィニストとして片づけられてしまうのも、あながち不正とはいえないかもしれない。

しかし、観点をかえて、後に発展したアフリカ・ナショナリズム、パン・アフリカニズムの立場からこれを再検討するならば、ガーヴィーの思想と行動は、当時にあつてむしろ先進的であつたとさえ、いえるのではなからうか。なぜなら、現代アフリカ・ナショナリズムの集約的発現体としてのパン・アフリカニズムは、「あるアフリカ人もしくはアフリカ系人もつている、アフリカ大陸は民族的故国であるという信念、アフリカ大陸をアフリカ人のリーダーシップのもとに統合し独立させたいという願望、およびその信念と願望とを拡大させようとする活動」(J・S・コールマン)として定義されるからであり、しかもガーヴィーの思想と行動は、当時のさまざまな黒人運動のなかにあつて、こうした意味での「アフリカ性」の濃度をもつともたかかつたとみられるからである。すなわち、人種主義的であつたということは、裏を返せばアフリカ系人としての自覚がヨリ鋭かつたということであり、分離を主張したということはナショナリスティックであつたことにほかなら

ず、アフリカへの帰還運動を組織したということは、民族的故国としてのアフリカをヨリ明確に意識していたことを物語る——とみるのは、決して無理ではない。

それどころか、以上の諸点に照らして考えれば、同時代の合衆国において黒人運動の主流をなし、かつ一般に前期的パン・アフリカニズムの主流をも同時に形成していたとされるW・E・B・デュボイよりも、ガーヴィーの方が先進的であつた、ということさえできるであろう。だからこそガーヴィーの思想と行動は、それが短命であつたにもかかわらず、合衆国留学中のK・エンクルマ（前ガーナ共和国大統領）を魅了し、遠くアフリカにあつたエンナムデイ・アジキウエ（前ナイジェリア連邦総督）に影響をあたえたのである。<sup>(3)</sup>

今世紀初頭、合衆国、西インド諸島の黒人運動のなかに生れ育ち、ヨーロッパ（とくにフランス人）のアフリカ文化運動と相互に影響をあたえつつ、第二次大戦後のアフリカに移入されて、その政治的、経済的、社会的、文化的独立・近代化を大陸的規模でリードしたパン・アフリカニズムの歴史を考へるとき、その前半期における主流の地位をデュボイにあたえ、ガーヴィーの運動を傍流として位置づけることは敢て異論を唱へないにしても、そのガーヴィーの思想と行動があらゆる点で、「傍流」として相対的に低く評価され終つてしまうことに、いささか不満を禁じえない。

そこでこの小稿においては、ガーヴィーの思想と行動を再吟味することによつて、かれがもつていたブラック・ナショナルイズム、パン・アフリカニズムの「先駆者」としての側面を浮きぼりにしてみたいと思う。

(1) これら批判者のうちで、ガーヴィーに対してもつとも厳しい評価をあたえているのはおそらくW・E・B・デュボイであろう。デュボイはガーヴィー主義について「それは世界の黒人を、とくに企業的面で統一しようという、計画性には乏しいくせに熱意だけはいやに旺盛な、決意の典型であつた。それは民衆煽動のための、ありとあらゆるナショナルイズムの、人種的な手練手管をもちいた。その弱点は、デマゴギー的な指導、財力の乏しさ、不節制な宣伝、そして植民地諸国のあいだにそれがひきおこした当然の不安であつた」(W.E.B. DuBois, *The World and Africa An Inquiry into the part which Africa has played in world history*, An enlarged edition, including essays on the personalities

and future of the nations of Africa, fourth printing, New York: International Publishers, 1968, p. 236.) と述べ、さらにガーヴィーがブラック・スター・ライン設立を計画した当時を回想し「ガーヴィーその人を評して『勤勉な理想家ではあったが、そのやり口は大言壮語にすぎ、無駄と不合理に満ち、かつほとんど違法でもあった』(W.E.B. DuBois, *Dusk of Dawn. An Essay toward an Autobiography of a Race Concept*, First Schocken edition, New York: Schocken Books, 1968, p. 278.) と断じている。しかしこれなどは後の回想であるからまた穏かな調子をおびている方であり、実際にガーヴィーと対立していた当時には「かれを『デモンでチビで醜男の黒人』と評して物議をかましたことすらあったほどである。(2)の点については、たとえば A.J. Garvey, *Garvey and Garveyism*, Kingston: A.J. Garvey, 1963, p. 76. (参照)) デモイの場合には、今世紀初頭から黒人知識層を基盤とし、ナイアガラ運動、全米黒人向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People—NAACP) 等を通じて合衆国を中心に黒人運動を展開し、ガーヴィーとはライバル関係にあつたのであるから、その舌鋒が鋭くなるのも当然であらうが、それ以外の論者にしても、その多くは敵しなほ程度程度の差こそあれ、基本的な評価の姿勢においてデュボイとはとんとかわらぬ(なお、デュボイに対するガーヴィーの反批判については、たとえば W.E.B. DuBois as a Hater of Dark People: Calls His Own Race 'Black and Ugly', Judging from the White Man's Standard of Beauty: Trick of National Association for the Advancement of Colored People to Solve Problem by Assimilation and Color Distinction, A.J. Garvey ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey or Africa for the Africans*, New York: Universal Printers, 1925, pp. 310-320. が参照) その他両者の対立状況を手記や往々要約したものの一つは、E.M. Rudwick, *W.E.B. DuBois. Propagandist of the Negro Protest*, New York: Atheneum, 1968, pp. 216-221. が参照)。

たとえば合衆国黒人問題に造詣が深く、パン・アフリカニズムについてもいくつかの論説を発表しているハーバード大学の R・ローガンはガーヴィー主義の一時の抬頭について、「一九一五年十一月十四日のブッカー・T・ワシントンの死、黒人および白人が南部から北部に大量に移動したこと、従軍してフランス戦線で戦った黒人兵士の苦難等が、ガーヴィーに、そのデモゴギー的な力を駆使して黒人ショーヴィニズムを利用する機会をあたえたのだ」(R.W. Rogan, "The Historical Aspects of Pan-Africanism, 1900-1945," in AMSAC ed., *Pan-Africanism Reconsidered*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1962, p. 45.) とする見方をしているし、英国のママリカ研究家の C・リーカムは「一方でガーヴィーの役割をある程度評価しながらも、アフリカへの帰還運動については『それは感情的には人をうなづかせるものをもつていたけれども、政治力としては不能であつた』(C. Legum, *Pan-Africanism A Short Political Guide*, revised edition, New York: F.A. Praeger, 1965, p. 16.) とし「ガーヴィー自身については『ロマンティックであると同時に愚かな人物であつた』(C. Legum, "Pan-Africanism and Nationalism," in J.C. Anene & G. Brown ed., *Africa in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, Ibadan: Ibadan University Press, 1966, p. 531.) と評している。

(2) J.S. Coleman, *Nigeria. Background to Nationalism*, Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1958, p. 425

(3) ガーヴィーが、一九三〇年代の合衆国に留学中であったエンクルマに対して多大の影響をあたえたことは、周知の事実である。エンクルマ自身が語っているごとく、この時期にあつてかれに最大の影響をあたえた文献は *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey* (まゝに引用したもののほか、一九二三年にも、こういうタイトルで第一巻と通常称せられている本が出版されている。エンクルマはその両方を読んだのであろう) であつた。なおこの点に関しては、K. Nkrumah, *Ghana The Autobiography of Kwame Nkrumah*, Edinburgh, Tonto & New York: Thomas Nelson & Sons, 1957, p. 45. および K. Nkrumah, *I Speak of Freedom A Statement of African Ideology*, New York: F. A. Praeger, 1961, p. 107. を参照されたい。他方、R. L. スクラーによると、アジキウエがガーヴィーの影響を受けたのは、かれがラモスにあつてハイスタールに通つてゐた当時のことである。とくにアジキウエは、ガーヴィー主義のブラック・シオニズムの側面に鼓吹されたといわれている (R. L. Sklar, *Nigerian Political Parties. Power in an Emergent African Nation*, Princeton: Princeton University Press, 1963, p. 49.)。

## 二、ガーヴィーの人種観とアフリカ観

「いまやわれわれは主張しはじめた。そしてわたしは、二度とふたたび眠りにつくことのない、目覚めたアフリカの先駆者にすぎないのだ<sup>(1)</sup>」とは、ガーヴィー自身の言葉であるが、こうした自己規定にもかかわらず、偏狭な人種主義者というイメージが、つねにガーヴィーにはつきまとつていた。たとへば、パン・アフリカニズムの有力な運動家であると同時にその歴史の記録者でもあつた G・パドモアでさえも、ガーヴィーを、南アにおけるもつとも急進的な人種差別主義者でありまた悪名たかきアバルトヘイトの創始者でもあるダニエル・マランと等置して、つぎのようにいつてゐる。「ガーヴィーは、マラン博士と同様《人種の純潔性》を信念としていた。両者の分岐点は、このボーア人が白人種の純潔をもとめ、この黒人が黒人種の純潔をもとめていたというところにあつた<sup>(2)</sup>」。たしかにこの言葉自体は誤りでなく、ガーヴィーが黒人種の純潔を主張していたのも事実であるが、それにしても、白人の人種的優越性を前提としていたマランの(人種差別的)主張とガーヴィーの主張とを、単に白と黒の相違にすぎないかのごとくに説明することは、極めてミスリーディングである。

たしかにガーヴィーは、あらゆる問題を人種という言葉で語つた。しかし、それはかれが黒人種ショーヴィニストであつ

たからではなく、また他人種とくに白人種を敵視していたからでもなく、当時にあつては黒人問題は「人種」問題そのものであつたからであり、したがつて人種という用語以外の用語をもつてしては、黒人問題を語りえなかつたからであつた。

また、たしかにガーヴィーは、人種的純潔を主張し、白人社会への同化を拒否し、黒人の分離発展を提唱した。しかしそれは、厳しい差別と強い人種的偏見のもとで非人間的生活を強いられている黒人大衆を救済するためには、かれらを白人優越主義の社会から隔離する以外に方法がないと考へたからであつた。

かれがそういう認識をもつにいたつたのはなぜか。そういう認識をささえるかれの人種観はいつたいどのようなものであつたか。まず、その概要をさぐることからはじめよう。

## I ガーヴィーの人種観

「黒人のもつている真のパスポートはただ一つであるように思われる。それはかれの黒い顔である。かれがその生国の人でないし市民として、他のどんなパスポートを提示しようと、かれに対するその処遇の方法を決定するのは、結局はその黒い顔であり、それも通常、白人以下の処遇を受けることになる」<sup>(3)</sup>

一九一四年のある夏の夜、ヨーロッパから故国ジャマイカへむかう船のなかで、一人黙考するガーヴィーの頭に浮んだのは、右のごとき確信であつたという。この直後、ガーヴィーは、ジャマイカで万国黒人向上協会を設立するのであるが、以後二六年間、かれが没するまでかれの思想と行動を根底にあつて律したのは、そうした確信であつた。こうした確信は、むろんこのとき突然かれを襲つたわけではない。そうではなくて、故国ジャマイカ、中南米諸国、英国、ヨーロッパ（この当時はまだ合衆国にいつたことがなかつた）<sup>(4)</sup>等での直接経験・間接経験がこの時点で結晶した結果、ガーヴィーにそうした人種的確信となつて定着したのである。



このように黒人の地位や黒人に対する処遇の仕方が「黒い」ということによつてのみ律せられるとすれば、その地位の向上、処遇の改善を、いかなる方法によつてもたらずべきであろうか。ガーヴィーにとつて「黒い」という肉体的特徴から逃れようとする態度ははじめから問題外であつた。なぜなら第一に、「エチオピア人はその皮膚をかえることはできない<sup>(5)</sup>」からであり、第二に、さまざまな人種が存在するのは、ガーヴィーによれば、神の意志だからである。かれはいつている。

「われわれの皮膚の色が薄かろうと、黄色かろうと、黒かろうと、あるいはもつと別の色だろうと、われわれにとつてなすべきことはただ一つ、団結して人種をつくりあげること、これである。神はみずからのイメージにあわせてわれわれを造り給うた。そして、神がかくわれわれを造り給うたのは、なにか目的があつたからである。であるとすれば、みずからの人種を破壊しようなどと、どうしてできようか?<sup>(6)</sup>」

このように「黒い」ということから逃れえず、また逃れるべきでもないとするれば、方法はただ一つ、「黒い皮膚」を侮蔑と嫌悪の対象から誇りと栄光のしるしへ、マイナス・シムボルからプラス・シムボルへと転換させること以外にない。そしてガーヴィーは、こうした転換が可能であると考へた。なぜなら、黒人は本質的に劣等人種ではないし、また黒人に対する偏見は、黒人自身の手で除去しうるからである。

黒人は本質的に劣等人種でないという点について、ガーヴィーはこういう説明の仕方をしてゐる。「二〇世紀文明においては、劣等人種も優越人種も存在しない。後進民族というものは存在するが、そのことは、かれらが劣等だということではない<sup>(7)</sup>」。さらに、黒人は本質的に劣等でないどころか、歴史書をひもとけば黒人が先進的であつた時代すら存在したことがある、として、ガーヴィーはつぎのように述べてゐる。

「白人世界はつねにわれわれから歴史を奪ひ、われわれの歴史をわれわれに信じさせまいとしてきた。かれらは、紀元前一三五〇年ごろ在位したエジプトの王ツタンカーメンは黒人でなく、また古代エジプト文明もファラオーたちも、わが黒

人種のものでないとわれわれにいうが、そんなことで眞実はまげられない。公正な心をもつた歴史家は皆、かつて白人たちが洞窟に住んで野蛮な生活を送っていたころ、黒人が世界を支配していたことや、そのころ学問の府であつたアレキサンドリアの諸大学で多数の黒人教授が教鞭をとつていたことや、また古代エジプトが世界に文明をあたえたのであり、ギリシヤやローマはエジプトの芸術・文学を盗んでこれを自分たちの功績にしてしまつたのだということを、しつてゐる。しかしながら、白人たちがあらゆる術策を弄して黒人をその歴史に無知のままにしておこうとするのは、驚くにあたらない。三〇〇〇年まえには黒人が政治において優越し、かつ芸術、科学、文学の創始者であると同時に教師でもあつたというのを、今日、全世界に対して認めるのは、白人の誇りをいたく傷つけることになるからである。かつてわれわれの保持していた力や様式は失われてしまつた。しかし二〇世紀の今日、われわれはアフリカの再建のうちにそれがふたたびよみがえるのを、まのあたりにみようとしてゐるのである。然り。新しい文明、新しい文化を、わが人民のうちに生ぜしめよ。そしてふたたびナイルの流域をして、最高の知識、最高の芸才をもつ黒人の住む、科学、芸術、文学の沃土たらしめよ<sup>(8)</sup>。

そして、こう叫ぶことによつてガーヴィーは、劣等感にうちひしがれ社会の底辺にあつて立ちあがることをしらなかつた黒人大衆を、人種の誇りに目覚めさせようとしたのである。E・D・クロノンも指摘しているごとく、「ガーヴィーにとつて、全世界の黒人の救済は、みじんに碎かれた人種の誇りの再建と、眞のニグロ文化の回復によつてはじめて実現するといふことは、自明の理であるように思われた<sup>(9)</sup>」のであつた。

こうして黒人大衆が過去の栄光を認識し、人種の誇りに目覚めれば、黒人の救済を、「偽善的」な一部の白人や混血知識人の手にゆだねずに、黒人みずからの手でおこなう道が開けるであろう。ガーヴィーは、黒人に対する人種の偏見を克服するための、黒人の主体的行動を要求して、つぎのごとく述べてゐる。

「自分の必要を満たそうとして、自分ではなんの努力もせずに他人種の親切心や同情心に頼ろうとする傾向を多くの人がもっているというそのことが、いまある人種的不名誉そのものなのであり、それによつてわれわれは判定され、またそれによつてわれわれは、自分たちに対するもつとも強い偏見を、自分たち自身でつくりだしてきたのである。……もし全世界の偏見をうち破ろうと思うなら、黒人は立ちあがつてことをなすべきである。……われわれはみずから物質的成功へむかつて踏みださねばならない。そして、われわれ自身の努力と活力によつて、人間進歩の判定材料になる力を、世界に示さなければならぬ」<sup>(10)</sup>

要するにガーヴィーの認識では「成功にまさる力はない」<sup>(11)</sup>のであり、みずからの力で進歩・発展を遂げれば、人種的偏見は自動的に消滅するはずであつた。そして、進歩・発展への道へ踏みだすためには、まずもつてみずからの能力を信じ、みずからの人種に対して誇りを抱かねばならない、と考えたのである。

「人種的純潔性」の要求は、まさしくこうした認識のコロラリーでもあつた。なぜなら、ガーヴィーの論理では、人種的誇りをもつて黒人種の再建をはかる事業と、白人種との混淆によつて既存の人種的社会的階梯を少しでも昇ろうとする行為とは、まったくあい容れないものだつたからである。のみならず、ガーヴィーによれば、それは黒人の一体性を喪失させる人種的裏切り行為、人種的自殺行為ですらあつた。一九二四年一月一日に、「所信」と題する演説のなかでガーヴィーはつぎのように述べている。「万国黒人向上協会は全黒人を一つの強力かつ健全な人種へと統一合体することを提唱する。協会は人種的混淆と人種的自殺に反対する。……協会は、黒人種の純潔性を、そしてまた白人種の純潔性を維持すべきであるという信念をもっている。協会は、富める黒人が貧しい白人と結婚することに反対する。協会は、富める白人または貧しい白人が黒人の婦人を利用することに反対する」<sup>(12)</sup>

以上の主張のなかでも部分的に触れられているように、ガーヴィーは単に黒人種の純潔のみならず白人種の純潔をも要求

している。すなわち、ガーヴィーによれば、人類は人種単位で集団を構成し、それぞれの人種が純潔性を堅持しつつ主体的に自己発展の道を歩むことによつて、人類全体の福祉と向上がもたらされるはずなのであつた。したがつて、こうした考え方からすれば、混血の存在は人種のみならず人類の破壊にまでつながるのであり、それゆえに、道徳的に許さるべからざることだつたのである。このことは、「人種の純潔・痛切な要求」と題する一文のなかの、つきのごときガーヴィーの言葉に、ヨリはつきりと示されている。

「一部の白人種とその仲間である黒人混血とからなる混濁主義者たちの、破壊的な宣伝ならびにその邪悪な努力に強く反対することによつて、この二つの人種の将来を慎重かつ積極的に守ることが、白、黒両人種のなかの高潔かつ道徳的純粹性をもつた人たちの義務である。混濁は、両人種の道徳的破壊につながり、かつまた、人類の生活や所業を道徳的、批判的に判定するだけの社会的立場や道徳的背景をもたぬ混血層を、ふやすことになるであらう」<sup>(13)</sup>

ガーヴィーが、デュボイをはじめとする混血の黒人運動指導者たちを徹底的に憎悪したのは、一つにはかれらの運動が、白人社会体制のなかでの人種の平等を主張したという点で、ガーヴィーの運動とあい容れない性質のものだつたからであるが、また一つには、前述のごとく、かれらの存在が、右のような道徳観に照らして許すべからざるものだつたからでもある。また、ガーヴィーの批判者たちがしばしば言及する、ガーヴィーと白人人種過激主義者団体ク・クラックス・クラン（KKK）やアングロサクソン・クラブとの接触も、人種の混濁の拒否・人種の純潔性の唱道といつた点でこれら団体と共通点があるという、ガーヴィーの誤解によるものであつた。<sup>(14)</sup>

さて、以上のごとくガーヴィーは、過去の栄光の認識、人種の誇りの回復、人種の純潔性の主張等を軸として、黒人種の自力更生、物質的進歩・発展への主体的行動を要求したのであるが、それを実現するための物理的必要条件としてかれが挙げたのが、「人種的分離」であつた。なぜ人種的分離が必要不可欠かといふは、いかなる人種も強い自己保存の不能をもつ

ているからであり、したがって複数人種が単一社会のなかで競合関係にたてば、かならず一方が破滅の淵へおいやられる結果を生むからである。現に、世界における人種対立の状況をみると、「全世界の白人は、自己の将来および他人種の将来を考えて神経質になつており、自己保存の要求をもつて……政治・支配の両面で白人種が第一等の地位を占めねばならない」という叫びをあげている<sup>(15)</sup>。かくてガーヴィーは、「こうした一般的態度に直面している以上、人種的支配および究極的な絶滅のおそるべき災難から身を守る方向へその力を結集する以外に、黒人はなにをすべきであらうか？」として黒人全体の団結を訴えつつ、さらにそのような危機を打開する方法として、つぎのごとき要求をおこなうのである。「だれにも害をあたえたくないという前提で、万国黒人向上協会はつぎのように考える。すなわち、黒人は妥協も弁明もなしに、白人が自己保存のためにしているごとく、人種の誇りと人種愛の精神に訴えるべきであり、かくして他人種が白人アメリカ、白人カナダ、白人豪州の叫びを挙げているのに対して、われわれも《黒人アメリカ》の叫びを遠慮なく挙げるべきである<sup>(16)</sup>」。ガーヴィーはまた、「人種的理想」と題する演説のなかでつぎのように訴えてもいる。

「すべて人間は自由でなければならぬ。——自分自身の救済を計画する自由をもたねばならない。自己の運命を創造する自由をもたねばならない。自己の文化と文明を育てあげるために、みずからの国家を建設する自由をもたねばならない。……われわれ黒人は、ヨーロッパやアメリカをわれわれの手に渡せと白人に要求しているわけではない。われわれは黒人を取容するのに必要だからアジアをわれわれに渡せとアジア人に要求しているのでもない。そうではなくて、われわれは、正しく正義なる世界に対して、アフリカを、離散し虐待されているその子等の手にふたたびもどすよう要求しているのである<sup>(18)</sup>」

ガーヴィーの主張した「アフリカへの帰還運動」は、それが実際に計画された当時はもちろんのこと、さらに後世の史家からさえも批判されているが、その実現可能性の面でたしかに難点をもつていたにしても、それを貫く論理は別段、奇異で

も夢想的でもなく、むしろ欧米世界における人種問題のむつかしさを考えれば、原理的に肯定すべき点を多くもっていたといえよう。

ともあれ、かくして黒人種の主体的向上・発展の場としての「アフリカ」が、ガーヴィーの視野にくつきりと浮びあがってくるのであるが、この「アフリカ」についてガーヴィーはどういう認識をもっていたであろうか。

## II ガーヴィーのアフリカ観

ガーヴィーはアフリカについてしばしば語っているが、入手しうる資料のなかにあつてもつともまとまつたかたちでアフリカを論じているのは、一九二三年四月十八日執筆の「アフリカの富」と題する一文であろう。この論説のなかでガーヴィーはアフリカの豊かな鉱物資源にふれ、白人資本家がそれらの資源をいかに開発し、アフリカの土着民をいかに搾取しているかを追究し、かつ、全世界の黒人はアフリカを防衛すべきであると強く叫んでいる。かれによれば、「今日のアフリカは諸国家・諸人種による最大の狩猟ゲームの場」である。そして「いまやこの《旧母国》の油田、ダイヤモンド鉱山、金山、鉄鉱山の開発のために投資するよう、さまざまの国の白人資本家に対して、アピールが公然とおこなわれている。このことは、短期間のうちにアフリカが世界の商業活動の中心になるであろうということ、およびそのときには黒人はいつものように新しいアフリカ文明の《負け犬》としての地位に当然ひきざげられるであろう、ということの意味する<sup>(19)</sup>」。こうしてアフリカを白人資本家層の意のままに放置しておくかどうかを、さらにはつきりさせるために、ガーヴィーはつぎのような予見を提示している。

「それは、もしヨーロッパやアメリカの資本がアフリカを發展させ開発するならば、もう五〇年か一〇〇年のうちにアフリカはヨーロッパやアメリカのように、白人の未来の母国になつてしまふであろう、ということの意味する。……かれら

白人は、豊かな富を生産させるべくアフリカを開発し、きたるべき一〇〇年ないし二〇〇年のうちに、おそらく世界最大の文明をもつてであろうような、世界で最も富める国家、富める大陸にアフリカをしてしまふであろう。しかもそれは、白人によつて所有され支配される文明であつて、その時代の黒人は……(ちょうど現在の合衆国におけるわれわれのごとく) 文明の二義的役割をおしつけられ、いま合衆国でわれわれがしているごとく、仕事とチャンスを乞いともねばならなくなるであらう<sup>(20)</sup>」

しかし、母国アフリカの、また全世界の黒人のこうした危機を打開するためには、いつたいどうすればいいのか。ガーヴィーの認識では、土着のアフリカ人は不幸にしてアフリカの豊かな鉱物資源がもつ価値を評価するだけの教育を受けておらず、またそれら資源を開発する方法についての知識も身につけていないがゆえに、白人にだし抜かれ、かつ強制労働によつて搾取されている。したがつて、「もし、土着のアフリカ人が自分自身の国の価値を評価しえないならば、かれらの同胞であるわれわれこそが、かれらに知識をあたえ、かれらは共通の幸福のために自国を開発する手助けを必要としているのだということ、かれらに認識させねばならない。……アフリカは、その資源を開発するための資本を手招きしている。金融資本であれ、人力資本であれ、そうした資本を白人に供給させないようによせよ。われわれみずからが黒人として貢献しようによせよ。適切な教育こそアフリカが要求しているすべてのものである。欧米の黒人はそうした教育を大巾に身につけている。わが同胞を欺き、その財産を強奪しているヨーロッパの狡猾な搾取者たちに対してわが同胞が防衛体制をとれるように仕向けるのが、われわれの義務である」<sup>(21)</sup>。

以上の主張からも読みとれるように、ガーヴィーは、アフリカを西欧世界黒人の単なる帰還先と考えていたのではなく、植民地主義によるアフリカの分割、搾取の現状をしつかりと踏まえて、アフリカ自体の救済のためにも、西欧世界の黒人とアフリカとを有機的に結びつけることが絶対に必要であると考えていたのである。

まさしく、E・U・エン・ウドムも指摘するように、「ガーヴィーはアメリカ黒人の問題をアフリカにおける植民地主義の問題と同一視していた」<sup>(22)</sup>のであり、また「合衆国の黒人を、植民地主義からアフリカを救済するための前衛として組織しようともめていた」<sup>(23)</sup>のであった。

こうしたガーヴィーの姿勢は、「パン・アフリカニズムの父」と称せられその正統性を広く認められているデュボイでさえも一九二三年の第三回パン・アフリカ会議を回想して「この当時までパン・アフリカ理念は依然として、アフリカのといふよりアメリカ的であつた」<sup>(24)</sup>と語っているのを考えあわせるとき、そして事実、この時期におけるパン・アフリカニズムの主流が主として、西欧世界内部における人種的不平等への抗議運動にすぎなかつたことを思い返すとき、「極めて先進的であつた」として、たかく評価されてしかるべきであろう。

なぜならば、パン・アフリカニズムが真の汎運動として市民権を主張するためには、世界に拡散しているアフリカ系人全体を、その国籍の相違、文化的相互異質性を超越して結集しうるだけの論理をもたねばならないからであり、しかもガーヴィーの姿勢と理念こそは、まさしくそうした論理にささえられていたと思われるからである。

パン・アフリカニズムの主流とされてきたデュボイの思想のなかで「アフリカ」がまだはつきりした像を結ばず、したがつてその運動も西欧黒人的パロキアリズムの域を脱しえなかつた当時にあつて、ガーヴィーは明確なアフリカ像をもち、黒人インター・ナショナルリズムともいふべき運動を組織しえた。しかも、ガーヴィーは「アフリカへの帰還運動」を通じて、欧米世界の黒人と母国アフリカとを直接結びつけようとさえ試みたのである。

多くの論者は、ガーヴィーの思想と行動に接するとき、その批判に急なあまり、その先駆者的側面を過少評価するきらいがある。しかしその行動が短期間に挫折したからといつて、それをささえる思想まで安易にしりぞけてしまうのは正当ではないであろう。T・ホジキンのいうように「一般的なアフリカ解放の理念が《パン・アフリカ》という言葉で表現されてき



(8) た」とするならば、ガーヴィーの思想、その中でも先駆者的なモン・モリカ理念であった、とかがいえるのである。

- (1) Minutes of Proceedings of a Speech by Marcus Garvey at the Century Theatre, London, Sunday, September 2, 1928, p. 22.
- (2) G. Padmore, *Pan-Africanism or Communism? The Coming Struggle for Africa*, London: Dennis Dobson, 1956, p. 89.
- (3) A. Garvey, *Garvey and Garveyism*, p. 11.
- (4) ローカス・ガーヴィーの著 "The Negro's Greatest Enemy," A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, pp. 124-127. ※参照\*
- (5) "Race Purity Desideratum," *ibid.*, p. 62.
- (6) "An Expose of the Cast System among Negroes" (Written from the Tombs Prison, August 31, 1923), *ibid.*, p. 60.
- (7) "Racial Ideals: Speech Delivered at the Madison Square Garden, New York City, N.Y., U.S.A., Sunday, March 16, 1924," *ibid.*, p. 119.
- (8) "Who and What is a Negro?" (Written January 16, 1923), *ibid.*, p. 19.
- (9) E.D. Cronon, *Black Moses: The Story of Marcus Garvey and the Universal Negro Improvement Association*, Madison, Milwaukee, London: The University of Wisconsin Press, 1955, p. 171.
- (10) "An Appeal to the Conscience of the Black Race to See Itself," A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 23.
- (11) *Ibid.*, p. 23.
- (12) "What We Believe" (January 1, 1924), *ibid.*, p. 81.
- (13) "Race Purity a Desideratum," *ibid.*, p. 62.
- (14) ローカス・ガーヴィーの著 "Application for Pardon" (United States Federal Prison, Atlanta, Georgia, June 5th, 1925), *ibid.*, p. 261. ※参照\*
- (15) "The Negro's Place in World Reorganization" (Written March 24, 1923), *ibid.*, p. 35.
- (16) *Ibid.*, p. 35.
- (17) *Ibid.*, p. 35.
- (18) "Racial Ideals," *ibid.*, p. 118.
- (19) "Africa's Wealth" (Written April 18, 1923), *ibid.*, p. 64.
- (20) *Ibid.*, p. 65.
- (21) *Ibid.*, pp. 67-68.
- (22) E.U. Essien-Udom, *Black Nationalism: A Search for an Identity in America*, New York: Dell Publishing Co., Inc., 1962, p. 48.
- (23) *Ibid.*, p. 50.

- (24) W.E.B. DuBois, "The Pan-African Movement," in G. Padmore ed., *Colonial and Coloured Unity, a Programme of Action* *History of Pan-African Congress*, London: The Hammettsmith Bookshop Ltd., 1963, p. 23. & DuBois, *World and Africa* p. 242
- (25) T. Hodgkin, *Nationalism in Colonial Africa*, New York: New York University Press, 1957, p. 181.

### 三、ガーヴィー主義運動の展開

前章で指摘したごとく、ガーヴィーの思想は、過去の栄光の認識、人種的誇りの回復、人種の純潔性の主張等を軸として、黒人種の団結、自力更生、物質的進歩・発展への主体的行動を要求したこと、その実現のための物理的必要条件として「人種的分離」を主張したこと、および「アフリカの救済」を「西欧世界の黒人救済」の不可欠の部分とみなしたこと、そのために合衆国の黒人を「アフリカ救済の前衛」として組織しなければならないと考えたこと、等をその特徴とするのである。また、これら諸点をその特徴とするがゆえに欧米世界における同時代の黒人運動家たちよりもナンヨナリスティックであると同時にパン・アフリカニズム的であつたといえるのであるが、こうしたガーヴィーの思想の特殊性は、かれの行動にどう具体化されたであろうか。本章では右のようなガーヴィーの思想ないしガーヴィー主義の行動的側面を要約したい。

ところでそのようなガーヴィー主義の行動的側面を要約するにあつては、万国黒人向上協会の活動状況、ブラック・スター・ライン (Black Star Line) を中心とした一連の黒人企業、および「アフリカへの帰還運動」に焦点を絞れば十分であろう。なぜなら、前述のごときガーヴィー主義の諸特徴のうち、黒人の団結とその主体的行動およびアフリカ救済のための前衛の組織化といった要求に政治的側面に対応するのが万国黒人向上協会であり、自力更生、物質的進歩・発展といった経済的側面の要求に対応するのが、ブラック・スター・ラインその他一連の黒人企業であり、またガーヴィー主義の論理的帰結である「人種的分離」を実現しようとした直接の動きが、「アフリカ帰還運動」そのものだつたからである。

I 万国黒人向上協会の創設と発展

万国黒人向上協会を創設しようという構想がいつガーヴィーの胸中に湧いたかは、かならずしも明確でない。しかし、A・J・ガーヴィー(未亡人)の回想を検討すれば、かれの「組織化」の構想が欧米世界の黒人とアフリカとを結びつけるというかたちではつきりと固まつたのは、かれが一九一二年から一九一三年にかけて英国・ヨーロッパを視察したころであった、ということがわかる。<sup>(1)</sup>これにさきだち、ガーヴィーは一九一〇年から一九一一年にかけて、コスタ・リカ、パナマ、エクアドル等中南米諸国を歴訪して、そこで西インド諸島出身のアフリカ系人労働者がいかに劣悪な条件のもとで搾取されているかを目撃し、また西インド連隊(West Indian Regiment)に編入されてアフリカに遠征したジャマイカ人、バルバドス人の口から、現地状況を聴取している。<sup>(2)</sup>この直後ガーヴィーが英国、ヨーロッパに赴いて、アフリカ人水夫やアフリカ人学生と接触したことも、かれのアフリカに対する認識を深めるのに役だつたであろう。ガーヴィーは以上のごとき諸体験と知識を土台にし、さらにロンドンにあつて、エジプト人ナシヨナリスト、D・モハメッド・アリの影響を受けつつ、欧米世界の黒人とアフリカを同時に救済するための組織づくりの構想を練つたのであつた。

一九一四年八月一日にジャマイカのキングストンで設立された万国黒人向上協会の規約の「前文」は、ガーヴィーがロンドンを離れる以前に書かれたといわれるが、<sup>(3)</sup>そこには、黒人種救済への強い要求と理想主義的なガーヴィーの人種観とが、はつきりとあらわれている。すなわち同規約前文には、万国黒人向上協会は「社会的、友好的、人道的、仁慈的、教育的、公共的、建設的、開放的団体」であつて、「全世界黒人の一般的向上のために全力を尽して活動したいと望む人たちによつて設立され」、しかも「その会員は、人類の兄弟関係と父なる神を信じ、全力をあげて崇高なるわが人種の諸権利を保持し、かつ全人類の諸権利を尊重することを誓約する」旨、明記されているのである。<sup>(4)</sup>

また、同協会の目的は、規約第三条につきのごとく明示されている。「人種間の普遍的な友愛的団結をうちたてること。

人種的誇りと人種的愛の精神を助長すること。人種的凋落をもとの姿にもどすこと。貧窮者を助け支援すること。アフリカの後進的部族の開化に力をかすこと。独立アフリカ諸国の帝国主義を強化すること。その国籍のいかんを問わず、すべての黒人を保護するための委員会ないし政府機関を、世界の主要な諸国に設置すること。土着のアフリカ諸部族のあいだに良心的なキリスト教信仰を広めること。わが人種の少年、少女にヨリ多くの教育と文化をあたえるために、総合大学、単科大学および中等学校を設立すること。世界的な規模の商業的、工業的交流をおこなうこと。<sup>(5)</sup>

右の目的のうち、第六項（独立アフリカ諸国の帝国主義を強化すること）は、いささか奇異な感じを抱かせるが、これはガーヴィー自身が「帝国主義」という用語に不慣れだったためであろう（レーニンの『帝国主義論』は当時まだ出版されておらず、ロシア革命もまだ起きていなかった当時であつて、「帝国主義」という用語はまだあまりなじまれていなかったであろうし、悪の代名詞のごときその定義もまだ確定していなかったであろう）。そしておそらくガーヴィーは、「帝国主義」という用語を「最高度に発展した強国」といつた意味にもちいたのである。因みに、四年後の一九一八年七月にニューヨークで改正発表された規約では、第六項は削除され、かわりに「独立黒人国家社会の発展を支援すること」および「黒人種のための中心的国家を建設すること」の二項目が附加されている。<sup>(6)</sup>

ともあれ、右のような目的を内外に示し、ガーヴィーはまずジャマイカにおいて黒人種救済のための活動に全面的に乗りだしたのであるが、救済さるべき当の黒人大衆はほとんど関心を示さず、くわえて「ニグロ」という言葉を嫌悪する混血層から激しい反対を受けて、運動はいささかも成果を挙げえなかつた。こうした窮境を打開するために、一九一五年春ガーヴィーは合衆国を訪問する決意を固めた。かれが合衆国訪問の決意を固めた理由は、第一に合衆国黒人の支援をうる必要があると考へたこと、第二にかねてから尊敬していた黒人運動家ブッカー・T・ワシントンと接触し、かれの主宰するタスケギー校（Tuskegee Institute）に範をとつた黒人大衆の教育機関をジャマイカに創立しようと考へたこと、などであるが、後者

に関しては、さらに「ブッカー・T・ワシントンこそジャマイカにおける協会の教育計画のための資金集めを援けうる唯一のアメリカ人であるうと思つた」という理由も、からんでいたといわれる。<sup>(7)</sup> 事実、この時期の万国黒人向上協会の運動は、前記の諸目的のうちの第九項すなわち「文化、教育の振興」に力点をおいていたのであるが、それは大衆の啓蒙のためのみならず、ガーヴィー未亡人が語っているごとく将来母国アフリカへ技術使節団として送るべき人材を育成するためでもあつたのである。<sup>(9)</sup>

ところが、こうした目的を抱いてガーヴィーが一九一六年三月二十三日に合衆国の土を踏んだとき、たのみのブッカー・T・ワシントンはすでに世をさつていた。しかしながらこうした不利にもかかわらず、ガーヴィーにとつて幸いなことには、合衆国における当時の人種的、社会的状況が、ガーヴィーの目指す大衆的黒人救済運動を育てるのに絶好の条件をそなえつつあつた。すなわち、まず第一に、第一次大戦のもたらした好況によつて南部の黒人が従来にもまして多数、北部工業地帯へ移動してきたこと、ついで第二に、これら黒人大衆は第一次大戦が合衆国にとつて「崇高なる民主主義的理想のための戦い」とされたにもかかわらず、それが自分たちの地位の改善、生活水準の向上にほとんど寄与しないことを発見して、徐々に不満を蓄積させていつたこと、さらに第三に、当時合衆国の黒人運動家たちはもつぱら知識層を基盤としており、大衆の組織化に手をのばさず、したがつて黒人大衆は放置されたまま、その不満を蓄積する一方であつて、絶望的な人種暴動によるほかそれを放射するすべをもたなかつたこと、などがそれであつた。

ガーヴィーはこうした条件を利用して活動を続け、一九一七年中に万国黒人向上協会ニューヨーク支部をハーレムに設立し、ただちに数百人の会員を集めることに成功した。そして、それを利用しようとする他政党人との軋轢によつて同支部は一時分解したものの、一九一八年には再組織され、ニカ月のうちに一五〇〇人の会員をもつにいたつた。<sup>(10)</sup> この当時まだガーヴィーはそのまま合衆国にとどまる意志をもつていなかった。しかし、ニューヨーク支部の要請により、外部政治家の手法

ら同支部を守るために、ハーレムに本部を設置し、協会総裁として活動を続ける決意をしたのである。<sup>(11)</sup>かくて万国黒人向上協会は発展の一途をたどり、一九一九年六月までに会員総数二〇〇万を越え、同年中に三〇の支部を各都市に設立するにいたつた。<sup>(12)</sup>

こうした運動の発展は、一つにはむろん前述のごとき合衆国の人種的社会的状态の所産であるが、また一つにはガーヴィーの並はずれた組織力と努力の成果でもあつたであらう。ことに一九一九年初期から刊行されはじめた週刊の機関新聞「ニグロ・ワールド」(Negro World) による広報宣伝活動の比重は大きなものであつた。同紙は、社説欄に「アフリカの救済による黒人の民族性の擁護」、「黒人種意識への目覚め」、「自決の主張」、「人種愛と自尊の鼓吹」、その他合計八項目からなる綱領をかかげて、黒人大衆の啓蒙に重要な役割をはたしたが、その発行部数は最盛期において一説には二〇万部であつたといわれ、<sup>(13)</sup>さらにG・シェパースンが指摘するところによれば、遠く西アフリカ、南部アフリカ、中部アフリカにまでいきわたり、<sup>(14)</sup>植民地政府によつて購読禁止の措置がとられたりしたほどであつた。<sup>(15)</sup>

合衆国を中心的舞台としたガーヴィーの運動の、以上のごとき大発展は、一九二〇年八月一日から三十一日にかけて開かれた万国黒人向上協会第一回国際大会の成功に象徴される。アフリカ代表を含め内外から二万五〇〇〇人の代表を集めてニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンで開催された同大会は、ガーヴィー自身の表現のとおり「記録破りの大会」であつた。<sup>(16)</sup>ガーヴィーはこれら代表たちにむかつて、つぎのように獅子吼した。

「われわれ黒人は、もはや他人のなすがままにはなるまいと決意している。五〇〇年以上ものあいだわれわれは異人種の手で苦しめられてきたのだ。……民主主義のために、世界の諸国はヨーロッパを四年にもわたつて血で荒廃させた。これら諸国は世界の黒人にむかつて、戦うよう呼びかけた。しかしながら戦いが終ると、そのために戦つた民主主義は、すべてわれわれから奪いさられてしまつた。……しかしわれわれは諦めないであらう。われわれは民主主義の旗をアフリカにか

かげるであろう。もしくは、われわれ四億人黒人は、神にその理由をつたえるであろう。……われわれはアフリカの戦場にその血を捧げるであろう。われわれが真の自由、真の民主主義そして人間の真の愛のために戦う、そのアフリカの戦場に」<sup>(17)</sup>

この演説の内容とその調子は、今日のアフリカ・ナショナリストたちのそれと驚くほど似かよっている。これによつても、ガーヴィーが「目覚めたアフリカの先駆者」であつたことがわかるのである。

さて、同大会はさらに「世界黒人権利宣言」を採択し、黒人の政治的、法的平等、完全な人種的自決、黒人政府のもとにおける自由アフリカ等、五四項目をうたいあげたが、その第四五項では、国際連盟を批判し、「黒人に関するかぎり、それが黒人から自由を剝奪しようともとめているがゆえに、無価値であり、無効である」<sup>(18)</sup>ときめつけている。

このほか同大会に関して特記すべきことといえは、ガーヴィー自身がアフリカ共和国臨時大統領に選出されたこと、運動の正式のカラーを赤(人種の血をあらわす)・黒(皮膚の色への誇りを象徴する)・緑(アフリカでの新しいヨリよき生活への希望を示す)の三色を決定したこと、「エチオピア、汝わが父なる国よ」を人種の聖歌として正式決定したこと、などであろう。かくて一九二〇年の第一回国際大会は、合衆国を中心にして、文字通り国際的規模で黒人大衆を結集し、強烈な「アフリカニズム」を全世界に示すことに成功したのであつた。くわえて、アフリカ代表のうち、モンロヴィア(ライベリアの首都)市長ガブリエル・ジョンソンを万国黒人向上協会の最高幹部兼アフリカ共和国國務長官に任命することによつて、組織面においても欧米世界の黒人救済運動とアフリカとを直接むすびつけえたことは、ガーヴィー主義が単なる夢想ではなかつたことを、さらに強く裏書きするものであつたといえよう。

ひるがえつて、この国際大会で「アフリカ共和国」を宣言し、ガーヴィー自身がその臨時大統領に就任したことも、別段誇大妄想的発想に由来するわけではなく、世界の黒人を守るためには、なによりも黒人国家・黒人政府が必要であるといふ、当初からの信念の然らしむるところであつた。この点については、たとえば「ニグロ問題の真の解決」と題する一文の

なかのつぎのような一節を引用することができる。

「われわれは、母国アフリカを外国の搾取者の手から取りもどし、全世界に分散したわが人種成員を保護しうるにたる強力なわれわれ自身の政府、強力なわれわれ自身の国家を創設することによつて、われわれ自身の問題を解決する決心をした。……人びとは、英国人を、フランス人を、ドイツ人を、あるいは日本人を、リンチするだろうか？ 否である。なぜ否か？ それはこれらの人びとが強力に組織された偉大な政府、国家、および帝国によつて代表されているからである」<sup>(19)</sup>

まさしくコルマンの指摘するごとく、「ガーヴィーは政治的独立の圧倒的優先性を強調した」<sup>(20)</sup>のであり、したがつてガーヴィー主義を合衆国黒人運動史の視点からみてさえ「政治的ナショナリズム」として位置づける論者がいるのも、その点に着目しているからであつて、不思議ではない。<sup>(21)</sup>そして前述のごとく「ニグロ・ワールド」紙を通じてガーヴィー主義がアフリカ諸地域にまで浸透し、一九二〇年秋にはナイジェリアのラゴスに万国黒人向上協会の支部をもつにまでいたつたのは、ガーヴィー主義が「政治主義」を前面におしだしていた点で、アフリカ・ナショナリストに強くアピールしたからであると考えられる。

かくして「国家的境界線を乗り越え国家的忠誠心をはらいのけつつ……ガーヴィー主義は世界的重要性をもつた運動として突然抬頭した」のであり、「多くの人びとにとつて万国黒人向上協会は、数えきれないほどいく世代にもわたつて抑圧され踏みつけられてきた黒人の祈りと希望に対する回答のように思われた」<sup>(22)</sup>（クロノン）のであつた。ガーヴィーが第一回国際大会で「四億の黒人を代表している」かのごとく演説したのも、あながち誇大な姿勢とはいきれないのである。

しかしながら、こうしたガーヴィー主義の運動面における上昇も、一九二〇年の第一回国際大会をピークとして、その後<sup>(24)</sup>は横ばい状態を続け、やがて後述のごときアフリカ帰還の挫折を直接の契機として、急激な下向線をえがくことになる。



## II 黒人企業の経営——経済的自立の試み

前章ならびに本章の冒頭で指摘したごとく、ガーヴィーは、黒人自身による経済的自立への努力を、グローバルな規模での黒人救済の不可欠の一部と考えていた。こうした認識をガーヴィーがもっていたのは、「黒人は白人の資本から独立し、独自の企業活動をおこなわねばならない」というブッカー・T・ワシントンの哲学の影響であるといわれるが、いずれにせよ、こうした目的のためにガーヴィーの手で設立されたのが、ブラック・スター・ラインをはじめとする一連の黒人企業であつた。

これら企業のうち、いわば「黒人の黒人による黒人のための」船会社ブラック・スター・ライン（正式には Black Star Line Inc. of Delaware）は一九一九年六月デラウェア州法のもとで資本金五〇万ドルをもつて設立され、額面五ドルの株式は一人二〇〇株を上限として黒人だけに開放された。そして同社は「黒人の工業的、商業的、友愛的、物質的福祉の増進を目的としたもの」であり、「人種の独立独行と人種の自決を目指すヨリ大きな努力へわれわれを方向づけ準備させる、人種的試みないし実験<sup>(26)</sup>」（ガーヴィー）でもあることを宣明したため、黒人株主たちはみずから人種の向上のために資金を投じているのだという使命感を、満足させることさえできたのである。のみならず、これによつて「もつとも貧しい黒人に対してさえ、大企業の株主になるチャンスにあたえた<sup>(27)</sup>」（クロノン）ことは、当時の合衆国における黒人大衆の経済的地位の低さからみて、画期的な挑戦であつたといえよう。

もつとも、そうした効果とはべつに、ブラック・スター・ラインの経営の問題になると、ガーヴィーに対してたかい評価はあたえられない。なぜなら、同社がその後一九二〇年十月にはブラック・スター・ステイムシップ・カンパニー・オブ・ニュージャージー（Black Star Steamship Co. of New Jersey）、一九二四年六月にはブラック・クロス・ナビゲーション・アンド・トレーディング・カンパニー（Black Cross Navigation and Trading Co.）として二度にわたる出発の仕直しを余儀なくされ

たのは、その設立をめぐる法的疑義その他がからんでいたためでもあつたが、しかし基本的にはガーヴィーの経営能力の不足によるところ大だつたからである。<sup>(28)</sup>

これ以外にガーヴィーが設立した企業としては、おなじく一九一九年にスタートしたニグロ・ファクトリーズ・コーポレーション (Negro Factories Corp.) がある。同社もブラック・スター・ライン同様デラウェア州法のもとで資本金一〇〇万ドルをもつて設立され、その目的は「ニグロ・ワールド」紙によれば「市場にだしうるあらゆる商品を製造するための工場を、合衆国、中米、西インド諸島、アフリカなどの大工業中心地に設立し、操業すること」<sup>(29)</sup>であつたが、実際には、食品チェーン・ストア、レストラン、洗濯店、服仕立店、婦人帽子店、出版社等を操業するにとどまつた。しかしながら、このように規模の点で不十分であつたとはいえ、このコーポレーションがその機能の面で一般の企業にないユニークな性格をもつていたことに、われわれは注目せざるをえない。すなわち同コーポレーションは、黒人の経済的機会をできるかぎり増すことに活動の力点をおき、かれらに対して、もし必要なら創業資金の融資のみならず、経営・技術指導をもおこなおうと試みたのである。<sup>(30)</sup>

以上のごときガーヴィーの「経済自立への試み」は、純粹に経済的な効果という側面に限定すれば成功したとはいえないであろうが、他方それをささえる経済自立の精神は、黒人大衆のあいだに浸透してとどまることがなかつたと思われるのである。<sup>(31)</sup>

### III アフリカへの帰還運動とその挫折

アフリカへの帰還運動がいわばガーヴィー主義の論理的帰結であるということは、まえに述べた通りであるが、この計画が実行に移されはじめたのは意外にはやく、すでに一九二〇年にはE・ガルシアを全権委員とする万国黒人向上協会代表团

をライベリアへ送つて、黒人移民の受け入れの可否を打診している。ガルシアはライベリア到着後ただちにキング大統領宛書簡<sup>(32)</sup>(六月八日附)を提出して、万国黒人向上協会による移民計画の趣旨を説明するとともに、「協会は経済的窮境からライベリアを救うために同国政府を可能なかぎり援助し、かつ同国を援けて外国政府からの負債を清算するべく、全世界から寄金を募るよう全力をつくすであろう」こと、およびその他の反対給付条件を示し、旬日をいわずして、「政府は……協会が工業、農業、実業等諸計画を遂行するうえで必要なあらゆる便宜を法的に可能なかぎりあたえることを、ちゅうちょなく保証する」旨の政府回答<sup>(33)</sup>を受けとることに成功した。もつとも、この時点においてすら万国黒人向上協会とライベリア政府とのあいだに一〇〇パーセントの相互信頼が存在したとは、とうてい考えられない。なぜなら少くとも協会側に関するかぎり、ライベリアの現状を厳しく批判した「ガルシア報告」<sup>(34)</sup>に接して、ライベリアに対する認識を少くも改められていたであろうからである。しかしながら、ガーヴィーはガルシア報告を敢て公けにしようとせず、むしろ前述のごとく、この直後に開かれた第一回国際大会で、モンロヴィア市長G・ジョンソンを協会ならびにアフリカ共和国の要職につけることによつて、ライベリアとの結びつきを強化しつつ、同年末にはライベリア復興のための「二〇〇万ドル借入れ」運動に着手した。

越えて一九二一年二月、ガーヴィーは、測量技師、薬剤師、農業専門家、建設技師などからなる専門家団体をライベリアへ派遣し、さらに同年三月には、ライベリア政府側と植民用地等につき打合せをおこなわせている。<sup>(35)</sup>

しかし、こうしたライベリア植民計画の進展のはやさと対照的に、協会側の資金的準備は容易に進まず、前述の二〇〇万ドル借入れ運動によつて一九二一年八月までに集めた約一三万七〇〇〇ドルの建設資金も、実際には経営難に喘いでいたブック・スター・ラインその他の企業にはほとんど投入してしまつたような状態であつた。<sup>(36)</sup>協会が一九二一年八月に開かれた第二回国際大会の直後「アフリカ救済基金」(African Redemption Fund)を創設したのは、こうした資金的窮境を打開することを狙つた苦肉の策であつたであろう。しかし、一九二二年八月改正の協会規約第十四条に明文化されたこの「アフリカ救

「済基金」が、どれだけの資金を調達しえたかについては、明らかでない。ただ、クロノンの指摘によれば、これによつて募つた資金はあまり現地に送られず、在ライベリア出先機関は資金欠乏に悩み、いちじるしくその士気が低下した<sup>(38)</sup>ということであるから、同基金の趣旨はほとんど生かされなかつたのであろう。

しかし、こうした資金的裏づけの欠如にもかかわらず、協会は一九二三年十二月に三度目の代表団・専門家グループを現地に派遣し、植民計画の最終的準備にとりかかつた。ガーヴィーは、同代表団をキング大統領に紹介するための書簡のなかで、一九二四年九月からはじまる最初の二カ年間に二万から三万家族をライベリアへ植民させるといふ当初の申し合せ事項を再確認するとともに、つぎのように述べている。「一家族が所持して植民する資金の額はおよそ一、五〇〇ドルと見積られ、したがつてこれら植民者たちが増加すれば、貴国の歳入に寄与することヨリ大となるであります<sup>(39)</sup>。ガーヴィーは、当時におけるライベリアの経済的逼迫を熟知しており、したがつて、こうした説得の仕方が受入れ側の態度をヨリ積極的にするうえで効果的であると判断したのであろう。

こうした協会の姿勢が事実受入れ側の態度を積極的にするうえで役だつたかどうかは推測しがたいが、とにかくこれ以後計画はさらに進展し、一九二四年二月十六日にはキング大統領の任命になるライベリア側の受入れ委員会から、植民に関する具体的提案が寄せられるにいたつた。同提案は九項目からなるが、その概要を示せばつぎのごとくである。

- (a) 年齢五〇歳以下の、身体強健にしてかつライベリア市民として永住する決意を有する者、を優先すること。
- (b) 農業専門家および工業関係者を優先すること。
- (c) すべての移民は一家族につき最低一五〇〇ドルの、またいずれの家族にも属しない単身者は最低五〇〇ドルの、現金を所持すること。
- (d) 植民は一時に五〇〇人を越えないこと。

- (e) 各植民者は、米国を出国する以前に、現ライベリア政府の権限を尊重する旨の誓約書に署名すること。
- (f) 最初の移住先は、ケープ・パルマス附近のメリーランド郡カバラ川流域に設置すること。なお製材機具、トラック、家用自動車、およびその他の交通手段を同時に搬入することが望ましい。
- (g) ケープ・パルマスに病院を建設すること、および第一次植民グループとともに医師を派遣し、医薬品を送附することが望ましい。——(h)(i)——省略<sup>(40)</sup>。

右の提案は一九二四年三月に帰国した協会代表団によつてもち帰られたが、これに対してガーヴィーはキング大統領宛三月三十一日附書簡をもつて同提案の趣旨に同意する旨表明するとともに、さらに「カバラ川流域にくわえて、シノー、グランド・バサ、ケープ・マウントの三地域に各八平方マイル以上の植民予定地を計五〜六カ所はらいさげること」その他の計画を逆提案している。<sup>(41)</sup>

かくて植民計画はほぼ完全にまとまり、協会は一九二四年六月ケープ・パルマスに最初の移住地を建設するための専門家を派遣するとともに、同年七月には五万ドル相当の建設資材をライベリアむけ船積みするところまでこぎつけたのであつた。因みに協会による移住地建設計画の具体的内容を示せばつぎのごとくである。

政治関係——(一)裁判所、郵便局、町政庁、(二)公共的治安・保全—警察署、消防署、病院

社会事業・娯楽関係——(一)公立劇場、(二)教会2、(三)大公会堂、(四)公園

教育関係——(一)公立図書館、(二)公立学校2、(三)公立高校、(四)大学、(五)商・工業学校

公共施設関係——(一)発電所、(二)浄水場、(三)下水設備、下水処理施設

その他——(a)交通運輸—(一)道路、街路、舗装道路、(二)岩壁、ドック、護岸、(三)鉄道(四〜一五マイル)、(b)食料供給所2、

(c)宿舎2。<sup>(42)</sup>

これによつても明らかなごとく、協会による町づくりの計画は相当具体的なところまで進行していたわけである。しかるに、ガーヴィーにとつてまったく意外だったのは、植民計画についてライベリア政府側の確約があつたにもかかわらず、協会の派遣した専門家グループがライベリアに到着するや否や、かれらが突然逮捕され国外に追放されてしまったことであつた。同様に移住地建設のために送つた資材もいつたん税関の倉庫におさめられたのち、その倉敷料として没収されてしまつた。

ライベリア側がなぜこのように態度を急変させたかについては、いくつかの理由が考えられる。まず協会との直接的な関係については、前述の「ガルシア報告」の内容がライベリア政府側にもれ、そのために同政府側が態度を硬化させたという推測が可能である。<sup>43</sup> 事実、ライベリアにおける支配層米国系ライベリア人の土着民に対する非人間的取り扱いその他を論難したガルシア報告は、ひとたびそれがライベリア政府側の目に触れば、同政府の態度を急変させるに足る内容のものであつた。さらに、これに関連して「アフリカ共和国臨時大統領」ガーヴィーの政治的意図に対する疑惑が、ライベリア政府を不安におとし入れたという見方もなりたつであらう。<sup>44</sup>

第二に間接的な原因としては、デュボイがライベリアを訪問したことの影響が考えられる。デュボイは前述のごとく合衆国におけるガーヴィーのもつとも痛烈な批判者であり、かねてからガーヴィーの運動を「大げさで大言壮語的で、しかもまったく実践不可能な計画<sup>45</sup>」と評していたほどであるから、そのデュボイが一九二三年末から一九二四年はじめにかけてキング大統領の二度目の就任式に参列しライベリア政府要人と接触したことは、ライベリア政府のガーヴィーに対する評価を大きくかえさせる結果を生んでも不思議ではない。<sup>46</sup>

第三に、ガーヴィーの「アフリカへの帰還運動」がアフリカ・ナショナリズムの炎をかきたてるであらうことを憂慮した英仏等植民地諸国の圧力がライベリアにくわえられたのではないか、という推測もまた可能である。むしろ確たる証拠を欠

く以上あくまで推測の域をでないが、たとえば「英仏は虎視たんたんとしてライベリアを狙っている。したがつてもしガーヴィーと協力すれば、わが国を分割する十分な口実をあたえることになつたかもしれない」という「ライベリアン・ニュース」の報道は、クロノンの指摘するように、ライベリア政府の公式見解を反映しているであろうし、また一九二五年一月に英領シエラ・レオンを訪問したキング大統領に対して、同植民地総督R・サルター卿が「大西洋を越えてきてライベリアをこの大陸のなかの人種的情悪の焦点にしようとしたエセ愛国者に対してドアを閉じた閣下が、西アフリカの全政府のみならず、アフリカ人の真の福祉を心から願うすべての人からも感謝されたのは、当然のことです」という称讃の言葉を送っている事実も、この推測をささえる有力な証拠たりうるであろう。たしかにG・シェパースンも指摘しているごとく、「一九二〇年代という時期は……ヨーロッパ諸政府がその植民地に対するアメリカ黒人の影響をもつとも懸念していた時期であつた」<sup>(49)</sup>のであるから、そのアメリカ黒人運動のうちでもつとも戦闘的、反植民地主義的色彩の濃厚であつたガーヴィーの運動を、これら諸政府が阻止するの挙にでても不思議ではない。

しかし、こうした事態を招いた理由がなんであれ、ライベリアへの植民計画は完全に挫折した。かくて「黒いモーゼ」の託宣も「約束の地への希望」も夢散してしまつたのである。

これ以後、ガーヴィーは路線を転換して、国内政治運動に力点をおくにいたつた。たとえば一九二四年八月の大会で「黒人の政治勢力を強化し、黒人の政治的意見を表明する」ための黒人政治同盟 (Negro Political Union) を設立したのは、その路線転換の一つのあらわれである。しかしながら、それが具体的な効果を生むよりはやく、ガーヴィーは、一九二五年二月かねてから系争中の郵便詐欺事件にかかわる有罪確定判決に接し、アトランタ刑務所に収容されたのであつた。この事件によつて、ガーヴィーの政治的生命は事実上終つた。それ以後のかれの生活状況については、第一章で概略触れた通りである。

ガーヴィーは、ライベリア政府が協会との契約を一方的に破棄した直後、あらためて合衆国の白人企業ファイアストーン・ラバー・カンパニー (Firestone Rubber Co.) とケープ・バルマスの土地貸借契約を結んだのをしつて、「ふたたび黒人はみずからを敗北に追いやつた。しかしその精神はまだ死んではいない」と語つた。<sup>(50)</sup>

たしかにその精神は死なず、それから四半世紀後のパン・アフリカニズム、アフリカ・ナショナリズムのなかに復活した。しかし、この言葉を吐いたときのガーヴィーの心中には、そうした将来に対する明るい見通しはなく、ただ挫折感のみが重く沈澱していただろう。

- (1) A Garvey, *Garvey and Garveyism*, pp. 11-12.
- (2) *Ibid.*, pp. 7-9
- (3) *Ibid.*, p. 12.
- (4) *Constitution and Book of Laws. Made for the Government of the Universal Negro Improvement Association, Inc., and African Communities' League, Inc., of the World* (In Effect July, 1918, Revised and Amended Aug., 1920 & Aug., 1921 & Aug., 1922), New York: Universal Press, Dept. of Labor and Industry, p. 2
- (5) UNIA Manifest, Booker T. Washington Mass Library of Congress, cited in Cronon, *op. cit.*, p. 17.
- (6) 一九一八年の規程に「*Constitution and Book of Laws*, p. 4. 第四の "Aims and Objects of Movement for Solution of Negro Problem," A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, pp. 37-38. 參照」
- (7) Cronon, *op. cit.*, p. 19
- (8) *Ibid.*, p. 18.
- (9) A. Garvey, *Garvey and Garveyism*, pp. 13-14.
- (10) "The Negro's Greatest Enemy" (This article, which is largely a chapter of autobiography, appeared in *Current History Magazine*, September, 1923), A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 128.
- (11) *Ibid.*, p. 129.
- (12) *Ibid.*, p. 129.
- (13) A. Garvey, *Garvey and Garveyism*, p. 31. なお、同紙の創刊年月については、ガーヴィー未亡人は一九一九年といひ、クロノンは一九一



八年一月としてゐる (Cronon, *op. cit.*, p. 45.) が、こゝではガーヴィー未亡人にしたがつておく。

(14) しかし、また一説には六万部ともおられたと云ふ。Cronon, *op. cit.*, p. 45.

(15) G. Shepperson, "Notes on Negro American Influences on the Emergence of African Nationalism," *Journal of African History*, vol. 1, no. 2, (1960) p. 303.

(16) "The Negro's Greatest Enemy," A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 131.

(17) A. Garvey, *Garvey and Garveyism*, p. 50.

(18) Cronon, *op. cit.*, pp. 66-67.

(19) "The True Solution of the Negro Problem," in H. Broetz ed., *Negro Social and Political Thought 1850-1920: Representative Texts*, New York & London: Basic Books, Inc., 1966, p. 554.

(20) Coleman, *op. cit.*, p. 189.

(21) Broetz, *op. cit.*, p. 24. ブロetzは同資料集の序文のなかで黒人運動史を移住・同化・文化的ナショナリズム・政治的ナショナリズムの四段階に分け、政治的ナショナリズムをガーヴィーに代表をあげている。

(22) 万国黒人向上協会ナイジェリヤ支部について、Coleman, *op. cit.*, p. 191. を参照。

(23) Cronon, *op. cit.*, pp. 70-71.

(24) もともと協会メンバーは一九二〇年以後も増加していたようである。すなわちガーヴィー自身の主張によれば、一九二〇年第一回国際大会当時の会員数は四〇〇万以上であつたものが、一九三三年九月当時には約六〇〇万、支部の数は九〇〇におよんだ ("The Negro's Greatest Enemy," A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, pp. 130-131.)。しかし批判者たちは、この数字は誇張であり、実際はその半分以下であつたといふを知つてゐる (Padmore, *Pan-Africanism or Communism?* p. 87.)。

(25) Cronon, *op. cit.*, p. 51.

(26) A. Garvey, *Philosophy and Opinions*, II, pp. 231-232.

(27) Cronon, *op. cit.*, p. 51.

(28) この点に関しては Cronon, *op. cit.*, pp. 78-79. を参照。

(29) *Negro World*, August 21, 1920, cited in Cronon, *op. cit.*, p. 61.

(30) Cronon, *op. cit.*, pp. 60-61.

(31) この点については、J. A. Davis, "The Influence of Africans on American Culture," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, vol. 1, (1910) p. 100. を参照。

- et al Science*, vol. 354, July 1964, p. 83.)
- (32) 同書簡の全文は A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, pp. 363-364. に収録されている。
- (33) 同回答の全文は *ibid.*, p. 365. に収録されている。
- (34) 「カラムン報告」すなわち “A Confidential Report on the True Conditions in Liberia by Commissioner Garcia to Marcus Garvey: Elie Garcia's Liberian Report dated August 1920” 44 *ibid.*, pp. 399-405. に収録されている。
- (35) Cronon, *op. cit.*, p. 125.
- (36) *Ibid.*, p. 126.
- (37) 同規約一四条は「アフリカ救済基金」について概略の如く規定している。(1)同団体はアフリカ救済の目的をもつて、全黒人から広く基金を募る権限をあたえられる。黒人種に属するすべてのメンバーは五ドルを下限とする金額を同基金に寄付するよう求められることとする。アフリカ救済基金に対するこの寄付行為は協会の現役会員に強制的に課せられるのではなく、すべての黒人の自発的寄付行為とする。(2)——省略。(3)同基金に拠出した者は例外なく、「アフリカ」運動に対して忠実であるという証明書をあたえられる。(4)アフリカ救済基金は「協会」運用資金をいへる。将々のアフリカ建設運動を促進する手段をめぐって、その目的とする(Constitution and Book of Laws, p. 32.)。
- (38) Cronon, *op. cit.*, p. 126.
- (39) “Letter to President of Liberia Introducing Delegation,” A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 368.
- (40) “Suggestions of Local Liberian Committee Appointed by President King,” *ibid.*, pp. 371-372.
- (41) “Reply Sent to President King,” *ibid.*, pp. 373-375.
- (42) “Colonization of Africa by Negroes as Solution of Race Problem,” *ibid.*, pp. 381-382.
- (43) たんぞん J.A. Rogers, *World Great Men of Color*, II, New York: J.A. Rogers, 1946, p. 609. 参考。
- (44) この点については たんぞん Padmore, *Pan-Africanism or Communism?* pp. 99-100. 参考。
- (45) DuBois, *Dusk of Dawn*, p. 227.
- (46) この点については、ガーヴェイ自身も同様の推測を述べている(A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 379.)。
- (47) *Liberian News*, August 1924, cited in Cronon, *op. cit.*, p. 130.
- (48) R.L. Buell, *The Native Problem in Africa*, II, New York: MacMillan Co., 1928, p. 733.
- (49) Shepperson, *op. cit.*, p. 303.
- (50) A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 385.

#### 四、結語——ガーヴィーとパン・アフリカニズム

以上においてわたくしは、ガーヴィーの思想と行動を、主としてその「アフリカニズム」的側面において把握し、概述した。それによつて明らかにしたのは、従来もつばらその「人種主義」的側面のみがクローズ・アップされ、「人種主義者」さらには「人種的ショヴィニスト」とさえ評せられてきたガーヴィーが、実際にはそれ以上に「アフリカ主義者」であつたということ、いやむしろ、「人種」という言葉で語られたガーヴィーの思想・「人種」という旗印のもとに展開されたガーヴィーの運動は、実は「アフリカニズム」そのものであつたという事実である。

実際、一九二〇年前後の合衆国、西インド諸島にあつて、ながいあいだの奴隸的身分・社会的、政治的、経済的価値剝奪状態に近い境遇のゆえに無気力の深淵に沈んでいた黒人大衆を覚めさせるには、「人種」というスローガンをかけ、「皮膚の色」の共通性に訴える以外に、有効な方法はなかつたであろう。ガーヴィーはそうした方法によつて黒人大衆を覚醒させ、かれらの意識のなかにアフリカ系人としての自覚をはつきりと植えつけた。またガーヴィーは「アフリカの過去の栄光」を指し示し、その人種的能力水準のたかさを指摘することによつて、黒人大衆に明日への希望と向上への意欲をあたえるところにも、「皮膚の黒さは恥のしるしではなく、名誉のしるしであるという、渴望のメッセージを、多数の黒人にもたらした」<sup>(1)</sup>のである。

こうした方法を、差別され虐げられている人種の指導者が採用するのは正当である。それは、アフリカ世界においてであれ、非アフリカ世界においてであれ、発生期のブラック・ナショナリズムがもつべく運命づけられた一つの要素であろう。

それにもかかわらず、ガーヴィー主義が合衆国ないし欧米の多くの史家によつて、不当なまでにその「人種主義的」側面を強調され、低く評価されてきたのは、一つにはガーヴィーの運動が短命だつたからであらうが、また一つにはこれら史家

の多くが、ガーヴィー主義を検討するにあたって、当時の黒人運動の主流の立場と同一の視点になつ傾向を強くもつてゐるからである。クロノンも指摘するように、ガーヴィー主義は「思慮深い人達の大多数がそうした障壁を取り除こうともめていたそのときに、人種的ナショナリズムの壁をたかく築こうとした」という意味で、たしかに当時の主流の立場に逆行した。そしてこのように逆行した以上、ガーヴィーがこれら主流「普遍主義」者の目にもつばら「人種主義」者として映じ、そのゆえに強い批判にさらされたのは仕方がないことかもしれない。しかし後世の史家までがそうした主流の立場にみずからを固定してしまうのは、正当ではないであろう。なぜなら、再三指摘したごとく、ガーヴィー主義は単なる欧米世界内部の黒人運動にあらずして、グローバルな規模をもつたアフリカ（系）人ならびにアフリカの解放を目指した運動だったのであり、したがつて、その後、とくに第二次大戦以後アフリカ・ナショナリズムおよびパン・アフリカニズムが正当な「アフリカの復権運動」として抬頭した事実を考えれば、ここで改めてこれらアフリカ・ナショナリズム、パン・アフリカニズムの視座からの、ガーヴィー主義の再検討、再評価を試みるからこそ、史家の任務であろうからである。

ところで、このようにアフリカ・ナショナリズム、パン・アフリカニズムの視座からすれば、前述のごとく、ガーヴィーは、アフリカ（系）人に解放への主体的行動を要求した点で、また「アフリカ」を単なる抽象的なシムボルにとどめずその解放を具体的な運動のなかにもちこんだという点で、さらに欧米黒人の解放と植民地主義からのアフリカの解放とを一体視していたという点で、たしかに「先駆者」的であつた。かつて（戦後）ナイジェリアを訪問したガーヴィー未亡人に対して、同国の著名な一政治家が語つたごとく、アフリカの指導者がいまいつてゐることをガーヴィーは四〇年前にいつたのである。<sup>(3)</sup>

セネガルのD・ティームは、前期的パン・アフリカニズムに人種運動、政治運動、文化運動の三つの側面があつたことを指摘し、このうち人種運動をガーヴィーに代表させているが、こうした見方はガーヴィーを人種主義者の範疇に類別して

と思われる点でいささかミスリーディングであるにせよ、アフリカ人によるガーヴィーの積極的評価の傾向をはつきりと示している。またエンクルマは、「アフリカ・ナショナリズム、パン・アフリカニズムに対していちじるしい貢献をしたのは、マーカス・ガーヴィーの『アフリカへの帰還運動』であつた<sup>(5)</sup>」として、ガーヴィー主義の現代アフリカへの貢献をヨリ明確に認めている。

かつてガーヴィーは、「わたしの播いたアフリカ・ナショナリズムの種子は地中深く埋り、しかも広範囲にわたつてゐるから、わたしにくわえられた不公正な圧迫によつてすら、破壊されないであろう、と確信してゐる<sup>(6)</sup>」と語り、また、第一次大戦の直後、「今次大戦はこれまでの多くの従属人種に自由を回復する機会をあたえた。次期大戦は、われわれが準備を整えつつ待つてゐるその機会を、アフリカにあたえるであろう<sup>(7)</sup>」と予言した。そして事実、歴史はその予言通りに展開し、アフリカ・ナショナリズムは第二次大戦後はなほなく開花し、しかもそれらナショナリズムは、「アフリカ全体の救済」を志向するパン・アフリカニズムによつて整合されつつ発展していつたのである。しかも、パン・アフリカニズムを現代アフリカの統一的な一箇のイデオロギーおよび運動に凝結させた「アフリカ」概念・「アフリカの主体性」の概念は、まちがひなく一九二〇年代にガーヴィーが唱え、鼓吹したものである。

ガーヴィーの運動は太く短かつた。かれは、アフリカ・ナショナリストにバトン・タッチする以前に、パン・アフリカニズムの舞台から姿を消した。しかし、ガーヴィーによる「アフリカニティー」の強烈な主張は、アフリカ・ナショナリストによる一九四五年以後のパン・アフリカニズムに、はつきりと具現化されたのである。

さきにも触れたごとく、過去のあらゆる事象は、つねに「現在」の視点から再検討され、再評価されねばならない。ことに二〇世紀のような巨大かつ急激な変動期にたつわれわれに対しては、そうした学問的姿勢がとりわけ強く要求されるであろう。そして本稿もまた、そうした内的要求に触発された、ガーヴィー主義再評価の一試論にほかならない。

- (1) C.E. Shilberman, *Crisis in Black and White*, New York: Random House, 1964, p. 137
- (2) Cronon, *op. cit.*, p. 221.
- (3) A. Garvey, *Garvey and Garveyism*, p. 287.
- (4) D. Thiam, *The Foreign Policy of African States Ideological Bases Present Realities, Future Prospects*, New York & Washington: F.A. Praeger, 1965, p. 10
- (5) Nkrumah, *I Speak of Freedom: A Statement of African Ideology*, p. 135.
- (6) A. Garvey, *Garvey and Garveyism*, p. 253.
- (7) "Negro's Place in World Reorganization," A. Garvey ed., *Philosophy and Opinions*, II, p. 36

(一九六九年四月一日稿)

#### 付記

本稿は、昭和四十三年度福沢記念基金の援助によりヴィズイテイニング・スカラーとしてボストン大学アフリカ研究センターでおこなった研究の一部である。資料、文献の利用に関しては同研究センター前所長ウィリアム・O・ブラウン名誉教授および現所長代理アデレード・C・ヒル助教授にいろいろとお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。なお、ブラウン名誉教授は本年二月一日心臓マヒで急逝された。併せてここに謹んで哀悼の意を表したい。